

---

# ウィーゼルのネタ倉庫

あいあむウィーゼル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウィーゼルのネタ倉庫

### 【Nコード】

N6392V

### 【作者名】

あいあむウィーゼル

### 【あらすじ】

これは作者がネタ段階にある作品を投稿しています。いわゆる「お試し版」みたいなものなので、お気楽にどうぞ。作品によってはアンチ成分を含むかもなので、ご注意を。暇な時に適当なネタを出していくので、よろしければどうぞ。

## インフィニット・ストラトス その1 (前書き)

今回のネタには以下の成文が含まれます。

「捏造」「転生者あり」「声が聞こえる」「IFの世界」「男の娘」  
?」「微アンチ」「なにこれかわいい」

## インフィニット・ストラトス その1

「一夏、大丈夫か!？」

「あ、ああ……………」

「逃げるぞ!」

突然の事に、彼は戸惑っていた。

いきなり自分を連れ去ろうとしていた男を、突然現れた友人が殴り飛ばしたのだ。

そのまま彼は自分の手を引き、走り出す。

「た、拓也…………… いったい、今は」

「大方、千冬さんの弟のお前をどっかの国が組織が狙ったんだろ！  
とにかく逃げるんだ!」

友人の手に引つ張られるままに走る一夏だったが、無意識のうちに疑問を感じていた。

彼が現れるタイミングが良すぎた。

自分が連れ去られようとしていたその瞬間、彼が現れ、自分を助けた。

まるで…………… そのタイミングを待っていたかのように。

(…………いや、友達を疑うなんて最低だな)

彼は自分を助けてくれた。

さっきの男は武器を持っていたし、下手をすれば自分達は撃たれていたかもしれない。

そんな危ない状況で、彼は自分を助けてくれたのだ。

「……………拓也、ありがとな」

「気にすんなって!」

……………しかし、一夏は知らなかった。

そんな友達である彼が、今現在どんな事を考えていたのか。

(よっしやあああつ! 一夏を助けたわけだから、これで千冬姉フラグはいただきだな! 後は鈴フラグも……………)

この男、渋見拓也(通称シブタク)は転生者である。

前世ではごくごく普通の学生で、ちよつとばかりオタクと呼ばれる部類に入っていたが、それでも平々凡々な人間だった。

そんな彼が事故で死亡し、生まれ変わったら何と「インフィニット・ストラトス」の世界だった。

『これは神が、俺にオリ主になれと言っているに違いない』

そして彼は行動を開始した。

幸運は続いた。「インフィニット・ストラトス」の主人公である織斑一夏は、たまたま自分の家の近くに住んでおり、幸いにも友人としての地位を手に入れる事が出来た。

ヒロインである篠ノ之箒や鳳鈴音とも知り合う事が出来た。

容姿も悪くない。むしろイケメンと呼ばれる部類に入るだろうし、頭だって悪くない。

そして今回、一夏の誘拐を防ぐ事が出来た。……………後は、物語が始まるのを待つだけだ。

……………実はこつそり、ISが起動できる事は実証済みである。

後は一夏と同じタイミングで動かせる事が判明すれば、IS学園には入学できる。

(ぐふふ……………もうすぐだ。もうすぐ俺のバラ色なオリ主人生が待っている！)

……………しかし、彼は失念していた。

今回、織斑一夏の誘拐を防いだ事によって、織斑千冬は異例のモンド・グロツソ2連覇を成し遂げる事に成功する。

そしてそれは、本来起こるはずだった千冬のドイツ軍への出向は起きない事を意味している。何故ならば、一夏の誘拐時にドイツ軍からの情報支援によって、千冬は一夏の救出に成功したのだから。

つまりそれによって、1人の少女と千冬との邂逅も無くなり、本来の物語から大幅にズレていく事となる……………。

風峰陸斗には悩みがあった。

遺伝子工学界の寵児と呼ばれ、数々の偉業を成し遂げた彼であったが、どうにも出来ない相手が1人だけいた。それは……………。

「出てかんか、バカモノ!!」

夜にも関わらず、その怒声が響き渡る。

他の部屋の者が「何の騒ぎだ」と廊下に出ると、そこにはシーツを素肌に巻き付けた眼帯の少女と、こめかみに青筋を浮かべた白衣の男性の姿があった。

（（（（（またかよ……………）））））





「……………だいたい、何で俺なんだ。30歳以上年も離れてるし、子持ちだぞ？」

「そんな事関係ありません！　ドクターはお若いですし、とても魅力的です！！」

そう断言するラウラに、老若男女問わずに周囲の人間が「うんうん」と頷いた。

まず陸斗の容姿だが、とても43歳には見えないほど若々しく、30代……………もしかしたら20代後半と言っても通用するかもしれない。そしてかなり整った顔立ちをしており、今は無精ヒゲを生やしているが、それもそれでワイルドな野性味を醸し出しており、なかなか似合っていた。

……………ちなみに、軍の人間にも密かに彼のファンがいて、彼に想いを寄せるラウラのため、クラリツサ以下部隊員達が尽力していたのは公然の秘密である。

「いや、だから」

「……………どうでもいいけど、時間考えてくれない？」

気がつけば、黒髪の少年が自分達を見下ろしていた。

顔立ちは陸斗によく似ていて、瞳だけが碧い。そしてその目は……………  
…笑っていない。

「父さんもラウラも、痴話喧嘩は余所でやってよ。今何時だと思っ

てるのさ。ボク、ついさつき戻って来てようやく寝付けそうだった  
トコなんだけど」

「く、玖楼……………？ その手に握ってる物騒なものは何だ」

「これ？ デュノアのおじさんからテスト頼まれたんだよ。とりあ  
えず目の前のバカップルに天誅下そうと思っただけとどうかな？」

ボソツと「答えは聞いてないけど」と付け加える。

そんな彼の表情に、周囲にいた者達は青くなった。……………下手をし  
たら巻き込まれる、と。

「その前に玖楼、1ついいか？」

「何さ」

「私の事は『お母さん』と呼べ。なお『義母上』ははつづえでも可だ」

その空気を読まない発言に対する返答は、玖楼必殺のかかと落とし  
だった。

そしてバカやってた父親には、容赦なくパイルバンカーが撃ち込ま  
れるのであった。

「……………というわけで寝不足なんだ」

『た、大変なんだね』

そんなこんなで朝を迎え、玖楼はあくびをしつつ、モニターに浮かんでいる少女にそう告げる。

そんな玖楼に対応している彼女は、どう答えていいか困ったような笑みを浮かべている。

『でも、おじさんもいい加減に素直になればいいのにね。本気で嫌なら、とつくにドイツから離れてるはずだし』

その辺りは玖楼も分かっている。

態度こそあだが、それでもラウラを本気で拒絶していないのは、陸斗自身も憎からず彼女の事を想っているからだろう。

「父さんも複雑なんだよ。ああ見えてフレドおじさんと同じ四十路で、歳も結構離れてるしさ」

『あ〜……………』

少女……………シャルロット・デュノアの父、フレデリック・デュノア。陸斗とは大学時代、机を並べた学友であり、年齢はほとんど変わらない。

唯一、フレデリックが年相応の外見であるにも関わらず、陸斗は20代後半ぐらいの若々しい姿を保っている事くらいだが（なお、同窓会で再会した際、「何でそんなに若い！」とドロップキックを決められたのは、ある種の伝説となっている）。

『確かおじさんが今年43で、ラウラが14だっけ』

「ほぼ30歳も離れてるから、そりゃ臆病にもなるよ」

『……………そうだね』

年の差の事を真剣に考えて、シャルロットは微妙な顔になった。世の中には50歳近い年の差結婚を果たしたカップルもいるらしいが、それはさすがにごく少数だろう。

「そう言えばさ、進学どうするの？」

『うーん……………ほら、僕一応代表候補生でしょ？ だからどうも、I

『S学園に行く事になりそうかな』

シャルロットのIS適性は高い。それも、フランス在住のIS操縦者の中ではダントツで、その操縦技量もまた、トップクラスである。それ故に、フランスの代表候補生として選抜されたのだが………その場合、年齢の事もありIS学園への編入が決定される。

「おじさん達は？」

『う、うーん………お父さんはともかく、お義母さんがね』

困惑した様子のシャルロットの言葉を聞き、玖楼は苦笑しつつ納得した。

シャルロットはフレデリック・デュノアの正妻の娘では無い。妾の子供で、2年ほど前に母親が病死した事で父親に引き取られたのだ。彼女の言う「お義母さん」とは、フレデリックの正妻の事で、シャルロットにとっては義理の母に当たる女性の事である。ちなみに関係は良好で、子供がいなかったためシャルロットの事を実の娘のように溺愛している。

そのため今回のIS学園行きにも難色を示しているというわけだ。

『まあ、洪々分かってくれた感じかな』

「おばさんとしても心配なんだよ。ヨーロッパならともかく、遠く離れた日本なもの」

IS学園が「何処にも属さない」とは言え、それを心配にする者もいる。

否、属さないこそそのメリットは大きいが、それ故に機密などの不確定要素も付きまとう事になる。

……唯一の救いが、現時点でISを動かせるのが女性だけで、従ってIS学園の人間もほぼ全てが女性である事なのだが。

『玖楼はどうする？ 一緒に来ればいいのに』

「……………隠し通せなければね」

玖楼は曖昧な笑みを浮かべた。

2年前のあの事件で、彼は顔が知られてしまっている。

政府の上層部は彼の存在を黙認しているような状態だが、このまま隠し通せるとは限らない。

隠し通せなければ……………シャルロットの言うように、そうなる可能性が高いだろう。

「一応こっちは親と相談。少なくとも同じタイミングで編入ってわけには行かないね」

『どっしってっ』

「国籍が曖昧だから」

その言葉に、シャルロットは納得した。  
玖楼は幼少期から、姉や父と共に世界各地を行ったり来たりしている。

今でこそドイツの大学に客員教授として席を置いているが、10年ほど前までは風来坊も同然の生活を送っていた。

そのため、玖楼自身もどこで生まれたか知らず（陸斗曰く「南米か北米か……その辺だったと思う」らしい）、そのため国籍についても曖昧なのだ。現在、ドイツに在住しているとはいえ、国籍についても手続きし直さなければならぬので、進学するにしても時間はかかる。

「ま、それが終わったら編入かな。それまで待ってて」

『うん、楽しみにしてるね』

その後、矢継ぎ早に時間は過ぎる。

その間にも、とある少女と博士の微妙な関係にも終止符が打たれたり、某会社では第3世代の開発がようやく始まったり、少年は再び厄介事に巻き込まれたりするのだが、それは全て割愛する。

そして1年後、2人の少女が日本へやってきたところから物語は始まる。

## インフィニット・ストラトス その1（後書き）

と言うわけで、ネタ第1弾です。

「こんなもん作る余裕あるんなら本編書けよ」ってツッコみは受け付けませんのであしからず。

私がラウラ関連の話で思ったのが、「一夏を助けに言ったから千冬は2連覇を逃した」というラウラが当初、一夏を憎んでいた理由。本文でも指摘しましたが、一夏が誘拐されたからこそ、ラウラは千冬と出会う事が出来たわけです。

しかし、もしも一夏の誘拐事件が起きず、千冬がモンド・グロツソ2連覇を成し遂げていたら？ その場合、ラウラは原作が始まっても「落ちこぼれ」のままだったかもしれません。

今回の話は、そんな「もしも」の世界で、ラウラが千冬とは別の人物と出会い、どん底から這い上がった話です。

### オリジナル登場人物

玖楼・H・風峰

本編の主人公その1。風峰陸斗の息子。デュノア社で働く玲夜という姉がいるらしい。15歳。

身長は150cmにも満たず、小柄な体型がコンプレックスとなっている。

ISに乗る事の出来る男性で、世界で3番目に見つかったとされているが、実際の時系列では2番目に発覚していた。彼がISを動かす事の出来る理由は、彼の出自に関係あるらしいのだが……………？

シャルロット・デュノアとは父親同士で親交があったため、幼なじ



みの間柄。なお、ラウラとの関係について1番複雑な気持ちを抱いている人物。

搭乗機は、第2世代「ラファール・リヴァイヴ」をベースにカスタマイズを施された「アズユール・ゼフィーレ」。

風峰陸斗

本編の主人公その2。玖楼の父親。

遺伝子工学の寵児として名を轟かせており、現在はドイツの某大学に客員教授として席を置いている。軍隊式格闘技の達人。

かつて、ヴォーダン・オージェの不適合によつて落ちこぼれていたラウラに、制御方法を遺伝子レベルで解析・伝授した事から「ドクター」と敬意を寄せられており、現在は強い愛情を抱かれている。

原作開始時にはラウラと婚約しており、その事で周囲からは「ロリコン」と呼ばれている（ラウラは微妙に勘違いして、「親しみを込めてそう呼ばれている」と思っている）。

渋見拓也

転生者にしてオリ主（笑）。一夏の友人でサード幼なじみ。世界で2番目に発見された男性IS操縦者。

実力は高いのだが、すぐ調子に乗るためそれを出し切る事が出来ない。なお、筆記試験では10位内に入っていた。

ハーレムを作るべく奔走するが、うまくいかない。根本的なところでお人好しなので、目の前で誰かが困っていると思わず手を差し出してしまふ。

オリジナルIS

アズール・ゼフィール

玖楼の第2世代型ISで、ラファール・リヴァイヴをベースに改造が施されている。

基本武装である二丁拳銃「タイガー・ピアス」は速射性に優れており、また相手の近接攻撃を受け止める事も可能（イメージとしてはガンダム00のケルディム）。全身に多数のミサイルポッドを搭載している他、右肩に大型のビームランチャーを装備。射撃兵装をメインに搭載しており、高火力・重装甲をイメージさせるが、機体各所に追加されたブースターにより、高い機動性を実現している。しかしその分、出力がピーキーになってしまい乗りこなすには相応の技量が必要とする。

玖楼の持つ「ある能力」に応じた特殊なシステムを搭載しているよ  
うだが……………？

幻想に生きる者 in リリカルなのは(前書き)

これは以前、ちょっとだけ書いていたIF物の連載版です。

9話ぐらいまで書いて放置してあったので、とりあえず投稿してみます。

幻想に生きる者 in リリカルなのは

足下に魔法陣のようなものが展開され、光が天へと上る

……… 光が晴れ、そこに残ったのは俺だけだった。

「ふう」

ん〜、と身体を伸ばし、旅の疲れを取る。

とはいえ、これで全部消えるほど柔なものじゃないのだが。

「陸斗、おかえりなさい」

と、そう言っただけで俺に近づく影が1つ。

肩口で切りそろえられた青紫の髪。ルビーのように鮮やかな瞳。羽衣のようなものを纏っているのが特徴的だ。

「ただいま、衣玖」

「お疲れ様です。………どうでしたか、今回の件は」

「ま、大変だったよ。いきなりこっち来たと思ったら無理矢理連れて行かれたし」

家にいた時、いきなり押しかけてきて理由を言わないまま連れて行かれて…………。

まあ、事情が事情だったから怒りはしないが、それでも少しは説明して欲しかった気がする。

「どちらにせよ、宴会の用意でもしてるんだろ？ そっちで詳しい事は話すさ」

アイツらの事だ。俺がいきなり連れ去られた事を知って、それを準備してるに違いない。

最初の頃はそれなりに混乱してたが、最近はかなり落ち着いてきたし。

そう、最近なんて普通に「どんな戦いだったか」っていう風にトトカルチョなんてやるようになった。

…………とりあえず、主犯は分かっている。後で分け前を没収するからいとして…………。

「それで陸斗、例の“隠し子”について詳しくお話を聞かせてくれませんか？」

…………ああ、そう言えばそうだったっけな。

その話してる最中に連れて行かれたんだし。有耶無耶になったのを忘れていた。

「その……………黙秘権は？」

「却下です」

にっこり微笑み、彼女は死刑判決を下したのだった。

[Side Out]

[Side Yukari]

1年ほど前、だったかしらね。

陸斗が外に出かけている時に、とんでもない大事件に巻き込まれたのは。

私も詳しく聞いたわけじゃないから、そこまで深く知らないのだけ

ど。

「それにしても、今回は運がなかったわね」

「……………うつさい」

見事に黒こげになった陸斗は、私の前で酒を飲んでいる。

今回、あの娘に連れて行かれたのは、ちょうど「隠し子」疑惑で衣玖と話し合ってる最中だった。

タイミングがいいのか悪いのか分からないけど、とにかく帰ってきから碌な目に遭わなかったとだけ言っておきましょう。

「それで結局どうなったのかしら？」

「どうにか理解してもらった。……………そこへたどり着くまでに何とか電撃喰らったし、締め付けられたが」

陸斗の「隠し子」疑惑。

まあ、噂の出所は分からないけど、何十年か前に魔界へ出張した際、魔界神と関係を持ったとか（この子の事だから、きつと一服盛られたか、夜這いかけられたかでしょうけど）。

多分だけど、その時に彼女が身ごもって、それで色々あった……………と、なお、陸斗はその事についてほとんど知らなかった。……………つい先日、当の本人から「認知してください」という手紙を受け取るまでは。

「近い内に会ってくる。さすがに会わなきゃダメだろうし」

そりゃあそうよ。

それで放置していたら、あなた男として最悪だし。

「そうそう、それが終わってからでいいんだけど……1つ頼まれてくれない？」

「何だ？」

「ちよつと厄介事が起きてるみたいなのよ」

幻想郷の正確な位置については、ちよつと話せないけれど……その土地が誰の所有になっているのかと疑問に思った事は無い？  
実は、幻想郷を表から守護する一族というものが存在している。  
その血に“人でないモノ”のそれを引く者達。血統的には私たち人外の存在に近い者達が、表側から幻想郷を護っている。その1つに“夜の一族”と呼ばれる……まあ、吸血鬼の一族がある。吸血鬼と言っても亜種であつて、人間の延長線上に在るだけなんだけど。

「夜の一族……懐かしいな。何年か前に騒動の後始末に行つたっけ」

陸斗が言っているのは、6、7年ほど前に起きた“血の反乱”事件。



一族の1人が引き起こした事件をきっかけに、人間に対して不満を持つ者達が決起しようとした事件。

もちろん、事前に抑え込まれたから反乱自体が起きずには済んだけれど、私たちとしてはしっかり監督してもらわなければ困るわけで、嚴重注意という結果に終わった。

……で、陸斗はその後始末。1番最初に起きた事件の事後処理を担当したわけ。

「今回、私たちに助けて欲しいっていう要請があったのは、月村家。例の綺堂家とは親戚に当たるわ」

詳しい事は向こうから聞いてもらえれば分かると思うけど、何でも在住している街で怪現象が起きているらしいのよ。

謎の爆発事故が起きたり、大樹の根が突然暴走したり……。何らかの怪異が関係している可能性があるから、調べて欲しいって。

「なるほど……。わかった。向こうから帰ったらすぐに向かう」

「ええ、お願いね」

とはいえ、簡単に話がついてくれればいいけど。

……なお、意外にも話は早く終わり、陸斗は翌日には外へと旅立ったのだが、疲れ切っているようにも見えたのは私の気のせいかしら？

[Side Out]

[Side ???]

最近はどうも、妙な事件ばかりが起きている。  
愛さんの病院が謎の爆発事故に見舞われたり、大木の巨大な根っこ  
が突然暴走したり……。  
そう言えば、変な声が聞こえたりもしてましたっけね。「助けて」  
って。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「いえ、最近の事件について考えていただけです」

2歳年下の我が妹、理音りのんに対してそう答える。

「……………ま、単なる事故つてわけじゃないのは確かだけど」

と、ショートカットな銀髪の女性……………リステイ槇原さんがこちらへと  
ていつか、ちゃんと服着てくださいよ。胸はだけて……………だらしな  
いですよ？

「いいじゃん。耕介だって出かけてるし。……………で、玲夜としては  
どう思うわけ？」

「何かしらの力が作用した、と考えられます。……………リステイさん  
も気になります？」

「そりゃあね。発表にはガスの破裂つて事になってたけど、実際  
に現場を見たボク達からすればそれはあり得ない」

となるとやはり……………何らかの意志がそこに働いている、というわ  
けですか。

「……………それに、愛の病院をあんなにしておいて、ただで済ますわ  
けには行かないし」

静かにそう言っているけども、リステイさんの瞳の奥にはしっかりと怒りの炎が灯っている。

怒るのも無理は無い。被害に遭ったのはリステイさんのお義母さん…… 槇原愛さんが院長を務める病院だから。

「家族の“夢”を目茶苦茶にされて、それで怒らないはずが無いよね。お姉ちゃんも怒ってるみたいだし」

「……………やっぱり分かる？」

理音はこう見えて、なかなか鋭いところがある。

…………… 私たちがここに暮らすようになって、もう1年が経とうとしている。

1年前、私たち姉妹はちょっとした事件に巻き込まれ、それで色々あって、ここ「さざなみ寮」で暮らし始めている。リステイさんを始めとする、さざなみ寮の人達は私たちにとって、家族も同然。家族の夢を蔑ろにされて怒りを覚えないはずが無い。

「……………」

「理音、どうかした？」

「…………… ねえ、1年前のアレが関わってるって事、無いよね？」

理音のその言葉に、私たちは凍り付いた。

1年前のあの事件。普通では考えられない、超常的な力が関わって

いたあの事件。

確かに、あそこまで常識外れなモノが関わっている可能性は充分にあり得る。

「おじさんなら、何か知ってるかな？」

「……………可能性としてはあり得るかもしれませんがね」

理音の言う「おじさん」というのはきつと、1年前に私たちを助けてくれた人の事。

私が密かに憧れている人物でもある。一言で言い表すならば、ハードボイルドを体現しているダンディなお人だ。

1年前から何度か相談に乗ってもらったりしているので、連絡を取る事はそう難しくは無い。

「後で電話して、話を聞いてみます」

「それがいいかもね。ボクはもうちょっと違う側面から探りを入れてみる」

ここまで超常的な事象が続発しているのだから、アレが関わっている可能性はあり得る。

もし、アレで無いとしたら……………それこそ、魔法とも言うべき事象なのかもしれない。

普通ならば頭ごなしに否定すべき事なのでしょうけど、生憎さざなみ寮と付き合っているとそんな考えは吹っ飛んでしまう。

……何せ、完全に常識から逸脱しているお方が何人もいるし、極めつけには……。

「あ、クーちゃん」

理音の膝の上に飛び乗ると、丸くなる子狐が1匹。

……この子の事知っているとさすがに私も考え方変わりますよ、そりゃあ。

つい半年ちょっと前にも色々ありましたし。

「……………あ、そろそろ診察の時間じゃありません？」

時計を見ると、既に時刻は3時を回っていた。

4時から理音の診察の予約を入れていましたっけ。時間を過ぎると混んじゃいますし、早くしないと……………。

「リステイさん、車出してもらっていいですか？」

「いや。んじゃ着替えてくるから、先に乗ってて」

そう言い、私に車のキーを投げるリステイさん。

それを受け取ると、私は理音の車椅子を押して車庫へと向かう。

……………この子は小さい頃、事故に遭って足を悪くした。それ以来、ずっと車椅子に乗って生活を続けている。

もちろん、気長にリハビリを続けてきているので、少しずつではあるけれども改善されつつある。特に最近は回復が良く、真面目に続ければ数年以内に歩けるようになるよ、主治医のフィリス先生は言ってくれた。

(私が絶対守りますから)

私は、この子のお姉ちゃんですからね。

[Side Out]

[Side Rickutt]

「あー、とりあえず初めまして。そっちのお嬢さんは「久しぶり」。  
風峰陸斗だ」

魔界から戻った俺はすぐさま、月村家が在住する街……海鳴市を訪れていた。  
大変だった。そう、大変だった。それ以上は聞かないでもらえると  
1番嬉しい。出来れば思い出させるな。

「ええ、お久しぶり」

そう答えたのは桃色の髪を垂らした、20代半ばぐらいの美女。  
彼女は確か、綺堂さくら……だったか？ 以前の事件でちよつと  
顔を合わせた事があるが、その時と比べてかなり成長したものだ。  
続いて口を開いたのは、彼女の隣に座っていた少女。年頃は、大学  
生くらいだろうか？

「初めまして、月村忍です。本当なら父母が挨拶すべきところですが、今はちよつと留守にしていますので」

「いや、構わない。それより、事情を聞かせてくれないか？」

真剣な顔で忍が語ったのは、紫から聞いていた事とほとんど同じ事  
だった。

しかし、事件が起きる数日前、街全域に奇妙な物体が降り注いだら



しいという話は初耳だったが。

「それがどういうものかかっていうのは？」

「残念ながら、詳細は不明です」

ふむ……………それが今回の事件と何らかの関わりがあるかもしれないな。

少なくとも、それは可能性の1つでしか無いが、手がかりの1つでもある。

とはいえ、俺はあまり探査能力には突出していない。探す時は、椀辺りでも借りてきて頼むとするか。

「では、明日から調査を開始したい。やはりこちらに在住した方がいいか？」

「そうね……………出来れば、そっちの方がいいかもしれないわ」

なら、どこか物件を紹介してもらおう必要がある。

念のために言っておくが、これでも俺たちはそこそこお金を持っている。

他の連中ならともかく、俺や紫は外でも活動する事が多々あり、その関係で色々と物入りがあるわけだ。

……………ちなみに、普段は神主様が管理してくれているので安心……………

…なのか？ 正直、あの人に任せていると、全額酒代に飛んでいき  
それで怖い。

「それならこの家に住めばいいのに」

「それだけは遠慮したい」

さすがに魔界であんな事があつてすぐ、美女の住まう屋敷に泊まり込むわけには行かない。

そうしたら確実に、衣玖が「氷点下以下の冷たい目」で俺を見るに決まっている。そして今度は超電磁砲レールガンが飛んでくる（アレは半端無く痛い）。

「分かったわ。適当な物件を見繕っておくから」

「よろしく頼む」

さてと、しばらく単身赴任という形になりそうだな。  
どちらにせよ、忙しくなりそうだな。

幻想に生きる者 in リリカルなのは（後書き）

【登場人物紹介】

風峰陸斗

種族：妖怪

保有能力：虚無を司る程度の能力

博麗大結界創建に携わった、幻想郷の賢者の1人。

実年齢は不明だが、相当長い年月を生きている妖怪。八雲紫とは旧知の仲で、彼が力ある妖怪に成長するまでを知る数少ない相手であり、何かと逆らえない相手でもある。彼の本性と伝承を知る者からは「空に坐す者」と呼ばれる。

永江衣玖とは夫婦で、既に半世紀近くを共に過ごしているが、陸斗自身が女性に好かれやすい性質のため、常にやきもきさせている。なお、隠し子騒動においては相当絞られた。

**最強夫婦 in インフィニット・ストラトス(前書き)**

最近、ISのアンチ物で「白騎士事件で家族を失う」という設定のものを見ます。

そこで考えてみたのが、同じ設定のこの話。

主人公は「御狐様」の玖楼と瑪瑙。

タグを付けるとしたら「アンチ」「復讐」「最強」「毒舌」「捏造」とかでしようか？

## 最強夫婦 in インフィニット・ストラトス

それは単なる気まぐれだった。

強い悲しみと絶望。そして憎悪。

彼女は単純に興味湧き、ただ単にその対象を見に來ただけだった。

そこにあつたのは、血の臭い。

圧倒的な熱量によって焼き尽くされても、彼女にはそれが感じられた。

その中心にいたのは、一人の少年。

物言わぬ肉塊と成り果てたモノに縋り付き、ただ泣き喚いている。

彼女が感じた強い感情は、全て彼から放たれている。

まだ10歳も迎えていないであろうその少年から、全て放たれていたのだ。

面白い。とても面白い。

彼女はそう思い、そっと少年の後ろに降り立った。

「力が欲しいか？」

そう問いかけると、少年は身体を震えさせる。

「そなたから全てを奪った者に、復讐する力が欲しくないか？」

少年は何も答えない。だが、彼女はさらに続ける。

「そなたは全てを奪われた。家族、夢、想い……ならば、今度はそなたが奪ってやればいい」

彼女の言葉は甘美な毒のように、少年の心に入り込む。

別に少年に同情してそんな事を言っているのではない。

彼女は思ったのだ。今の時点でここまで強い憎悪が、もっと強くなるところを見てみたいと。

その燃え上がった復讐の炎が、咎人をどのように焼き殺すのか。……それが見たいと彼女は思っただけだ。

「……………欲しい」

「何が欲しいんだ？」

「欲しい！　こんな事を引き起こしたヤツに、父さん達を殺したヤ

ツに、復讐する力が欲しい!!」

少年の目が、真っ直ぐ彼女を射抜く。

その瞳に宿るのは、強い憎悪の光。

種は蒔いた。これから先、もっと強いモノへと変わっていくだろう。

「いいだろう。そなたが望むモノ、妾が全てくれてやる!!」

後に「白騎士事件」と呼ばれるあの日から、私が私になってから8年が過ぎた。

その間にも、世界は大きく揺らいで行った。

インフィニット・ストラトス。通称IS。

元は宇宙開発用のパワードスーツだったそれは、この世界を大きく歪ませた。

男尊女卑ならぬ女尊男卑。

ISは女性にしか動かせないという欠点。それにより男性の立場は大きく低下し、俗に男の誇りと呼ばれていたものは地へと墜ちた。

8年前、たった2人の少女によって、今の世界は創られた。

(篠ノ之束と、織斑千冬)

ISの開発者である、社会不適合者。それが篠ノ之束博士。

間違いなく数十年に1人の天才であろうその女性は、何を考えたのか各国のコンピュータにハッキングをかけ、日本へ向けておよそ2000発ものミサイルを一斉発射させた。

それを迎撃し、圧倒的な性能を見せつけたのが「白騎士」。世界で初めて確認されたISである。

「白騎士」はミサイルの迎撃後、各国が送り込んだ戦闘機などの現行兵器の大半を撃破。その後行方をくらました。

そしてその「白騎士」の正体こそ、世界最強と謳われた織斑千冬で



ある。

ISによる国際大会「モンド・グロツソ」。その第1回大会に日本代表として出場し、たった1本の近接用ブレードと武器に頂点へと至った。

第2回大会でも決勝戦へと至ったが、突如出場を棄権し、その後謎の引退。現在はIS学園で教鞭を執っている。

『何かを得るためには、同等の代価が必要となる』

この言葉を聞いたことのある人は多いだろう。

某錬金術漫画でも耳にする「等価交換」の法則。質量1の物を得るには、同じく質量1の物を必要とする。

同じように、何かを為し得るためには同等の何かを必要とする。それは時間であれ、積み重ねであれ、様々だろう。

この法則で言えば、彼女達には世界を変えた代価が必要となる。

「だから今度は、私が奪う番」

奪われたのだから、逆に奪ってもいいでしょう？

先に手を出してきたのは向こうなのだから、答えなど聞いていない。

目の前で奪われたのだし、今度は彼女達の目の前で奪ってやるのも面白いかもしれない。

大切なものを奪われ、彼女達はどんな表情を浮かべるのだろうか？ 私と同じように憎悪に支配されるか、それとも全てに絶望するの  
か？

その光景を浮かべ、思わずくすくす笑ってしまふ。

「……………妙にご機嫌じゃのう」

そう言いながら、こちらへ寄ってくる女性が1人。

彼女の名は瑪瑙。対外的には私の名字を使い、遠縁の人間である神崎瑪瑙を名乗っている。

無力だった私に、力を与えてくれた……………共犯者と呼ぶべき存在だ。

「だって、もうすぐお預けの時間が終わるんだもの。楽しみで楽しみで……………」

ここまで来るまで8年かかった。8年も待った。お預けの時間はもうすぐ終わる。

「そう言えば、明日だったか。そのあいえず学園とやらの入学試験は」

「ええ」

明日、私はIS学園の入試を受けに行く。

とはいえ、日本の代表候補生として選抜されているため、筆記試験はパス。実技試験だけとなる。

実技試験はIS学園の教員と模擬戦闘を行い、その戦闘状況によって成績が変動する。例え負けたとしても基準要素を満たしてさえいれば及第点は取れる。……まあ、新入生程度の実力では教員を倒すには至らない。代表候補生レベルでなければ勝利する事は難しいですよ。

「……………む。同じ日に藍越学園とやらの入試も行われるのか」

当日日程の書かれた用紙を眺めていた瑪瑙がそう呟く。

あ、そうみたいね。

何でも藍越学園は学費が安く、就職率の良さが有名な高校らしい。その分倍率も高いらしいけど。

隣り合わせの会場だから、試験会場を間違えないようにという注意書きも書かれているけど……………普通、間違えるバカはいないでしょ。

「いや、分からんぞ？ 案外、藍越学園を受けに来たヤツがIS学園の入試を受けたりするかもしれん」

「“あいえつ”と“あいえす”を間違えて？」

「うむ」

顔を見合わせて、思いつきり笑った。

確かに響きは似てるけど、いくら何でも間違えるバカがいるなんて思えない。

「さて、と」

端末を操作すると、空中にウィンドウが表示される。

そこに記載されているのは今年度のIS学園入学者リスト。こっちは既に入学が決定している者のリストとなっている。

早くに試験を受けていたり、諸事情から試験を免除されていたり…

……もしくは、試験が形だけのものだったり。

もちろんこんなもの、普通にやったって手に入るものじゃない。色々と回りくどい手を使うハメになった。……もちろん、その甲斐はあったのだけでも。

「玖楼？」

「……………何でもないわ」

明日は入試だし、  
そう長く起きているつもりは無いし、  
そろそろ寝  
ましようかね。

## 最強夫婦 in インフィニット・ストラトス（後書き）

神崎玖楼

本作の主人公。15歳。

8年前の「白騎士事件」で家族を失い、瑠璃と出会い、復讐のための力を望む。

日本の代表候補生でもあり、次世代型量産機として見込まれる謎の機体を専用機に持っているらしいが……。

性別は男性だが、普段は女性の姿をしている。どのような経緯で代表候補生になったのか、またどのような方法でISを操縦しているのかは不明（しかし、普通の人間には不可能な方法でそれを可能にしている事は明らかになっている）。

篠ノ之束と織斑千冬に対する憎悪は極めて強く、「奪われたのだから今度は奪う」と公言している。

神崎瑠璃

本作の主人公の1人。年齢不明。

8年前の「白騎士事件」で家族を失った玖楼の前に現れ、力を望む玖楼に応える。玖楼の前に現れた理由は、人一倍強い負の感情を感じたため。

どうやって玖楼の憎しみを感じたのか、また彼女がどういった存在なのかという事は不明。

現在は玖楼と同じ「神崎」姓を名乗り、対外的には玖楼の遠縁という事になっている。

登場人物紹介です。

いくつかISのネタはあるんですが、どう書いていくかで悩んでる

んですよね。

読者がどんな話を望んでるか分からないところもありますし……。  
これの続きを読みたいという方がいたら、執筆してみますので。

**B A D E N D から始まるストーリー ( I S ) ( 前書き )**

最初は「幻想に生きる者 in IS」で書いてたんですけど、何  
だかいつの間に B A D E N D になってました。

何でこうなったのか……私にも分かりません。

ただ1つだけ言わせてください。…… IS に東方成分を混ぜ込む  
のは不可能に近いかもしれない。



## BAD ENDから始まるストーリー（IS）

私の目に飛び込んで来たのは、血溜まりの中で妹を抱き、呆然とする弟の姿だった。

「一夏、しっかりしろ一夏！」

「……………ちふゆ、ねえ？」

呆然とした表情はそのままだが、呼びかけると私に気づいた。

「千春が……………千春が……………俺を、庇って」

「ッ!？」

一夏の腕に抱かれた妹を、信じられない表情で見やる。

腹部から夥しい血が流れ、千春のワンピースは最早、何色だったかが分からない。

出来る限り冷静に、千春の首筋に指を当てて脈を取る。

……………まだ息がある。その事実思わずホッとするが、すぐ止血しなければ命が危ない。

適当な布が無かったので已む無く一夏の服を脱がせて、それを傷口に押し当てる。くそ……血が止まらない。

すぐにでもどこか治療の出来る場所へ運ばなければ……。

「千春をこのまま病院へ運ぶ。もう少ししたら軍が来るから、お前はここでじっとしてらんだ、いいな？」

「あ、ああ」

一夏が頷くのを確認し、そのまま飛び立った。

「……………」

手術室の前で、力なく頂垂れる千冬。

……………モンド・グロツソの決勝戦を放棄した事など、どうでもいい。  
今はただ、妹の無事を祈ることしか出来なかった。

「……………何が、世界最強だ」

弟たちは誘拐され、妹は撃たれた。……………自分の家族すら、守れて  
もない。

「織斑君」

その声に顔を上げると、そこにはスーツ姿の中年男性の姿があった。  
名前までは記憶していないが……………委員会の人間だ。

「話は聞いている。弟さんは保護されて、こちらへ向かっている」  
「……………そうですか」

「決勝戦だが、延期される事になった。……………もしかしたら、この  
まま中止になるかもしれんが」

姿を消した国家代表が、突然血まみれの妹を病院へ連れ込んだのだ。騒ぎにならないはずがない。

既に委員会の方へ事態は伝わっており、マスコミや各方面への根回しはされているが………恐らく、メディアへの拡散は防げないだろう。

だが、中止になってくれる方が千冬にとってありがたかった。

こんな状態で戦えと言われても困る。戦えるわけがない。

その辺りは男性も分かっているらしく、とやかく言わなかった。

「妹さんの様子は？」

「……元々、あまり身体の強い子では無いので」

手術に耐えられるか分からない。

力ない声でそう答えると、男性も「そうか………」と小さく返した。

千冬や一夏とは違い、千春は運動が苦手で、どちらかと言えば病弱な部類に入る。そんな千春が手術に耐えられるか………。

……手術開始から2時間、ようやく「手術中」のランプが消えた。

中から暗い表情を浮かべ、手術着の医者が出てくる。

「先生、妹は……………」

「……………手は、尽くしましたが」

そう言い、首を横に振る医師。

それだけで分かってしまった。だが、信じられない。信じられるはずがない。

千冬はそのままよろよろと、手術室の中へと立ち入る。

「千春……………」

手術台に寝かされているのは、瞳を閉じたままの妹。

けれど、その瞳が開かれる事は……………もう、無い。

「織斑君……………」

「……………少し、2人だけにしてください」

千冬言葉に、医師達と顔を見合わせ、男性はその場を後にした。

手術室の扉は閉じられ、その空間は千冬と千春の2人だけのものになった。

「嘘だと、言ってくれ」

いつものように、微笑んで欲しい。

でも、それはもう叶わない。

「あ、ああ……………ああああ」

千冬の口から嗚咽が漏れ出す。

立ってられない。そのまま膝を突き、嗚咽を止める事も出来ない。

「千春……………ちはるう……………」

物言わぬ妹の前で、彼女はただ泣き続ける。

……………この日、織斑千春は12歳の若さでこの世を去った。

そしてそれが、織斑姉弟の物語を大きく揺るがす事になる……………。

## BAD ENDから始まるストーリー（IS）（後書き）

オリキャラ紹介

織斑千春

織斑一夏の双子の姉。見た目は千冬似だが、キレイ系よりカワイイ系。非転生者。

千冬や一夏とは違い、運動が苦手で病弱。内向的で大人しい性格で、鈴とは親友と言っていていい間柄だった。

第2回モンド・グロツソ決勝戦において、一夏共々誘拐されてしまい、経緯は不明だが一夏を庇って銃弾を受け、救出に来た千冬によって病院へ搬送されるが、死亡する。享年12歳。

……あれ、死んじゃってますね。

どうしてこうなったのか、私にも分からないんです。

ただ、彼女の死が大きな波乱を呼びます。具体的に言うと、一夏や千冬の今後はもちろん、他の面々にも影響を与えます。そして千春自身も……。

タイトルから分かるかもしれませんが、この後の展開を希望する人は感想を。

ネタから出た誠：織斑千春in幻想郷（前書き）

というわけで、ネタから出た誠です。お待たせしました。

これは「BAD ENDから始まるストーリー」を出した際、感想で「幽々子が赤ん坊になった千春を抱いて、パパと呼ばれた陸斗が衣玖に黒こげにされる」というアイデアがあったため、実際に書いてみたものです。

なお、これを連載する事は現在考えていません。



ネタから出た誠：織斑千春in幻想郷

確かに俺は、世間一般で言う「女誑し」なんだろう。

普通に女の子から好かれてるって自覚はあるし、その辺りを何度も嫁から責められ、その度に黒コゲになってるわけだから。

でも、これだけは覚えておいてほしい。今の俺は衣玖一筋だ。自分の意志で浮気したりとか、そーゆー事は夫婦になってから一切してない。

………何でこんな事をここで強調しているかと言つと、

「きゃっきゃっ」

「は〜い、お母ちゃまですよ〜」

俺の視界の右端にいるのは、赤ん坊を抱いた古くからの友人、西行寺幽々子。

その隣には、扇子でにやにやしてる顔を隠してる、我が育ての親、八雲紫の姿もある。

「……………陸斗、そろそろ観念して自白したらどうですか？」

そして今現在、俺を羽衣で締め上げてるのは我が最愛の妻、永江衣玖。

頼むから……そろそろ離して欲しい。いくら俺でもここまで強く締められたら窒息する。

「だから俺は……無実だ」

「本当ですか？」

ジト目でこちらを睨む衣玖。

……確かに、疑われる余地があるのは……否定出来ないけど。でもだからって、幽々子とそういう関係になるはずがない。だってアイツ、俺より年う……。

「何か言った？」

さっきまで赤ん坊に向けていたのと同じ笑顔で、こちらに顔を向ける幽々子。

……何故だろう。その笑顔からは恐ろしいまでの威圧感を感じてしまうのは。

「ナンデモアリマセン。キットソラミミデシヨウ」

「あら、そう」

威圧感が収まり、幽々子は再び赤ん坊をあやし始める。

何でこんな事になっているのか。

そもそもの始まりは数時間前。いきなり冥界のこの白玉楼まで呼び出され、何かと思い訪ねてみると……………。

『ほぐら、パパでちゅよ』

赤ん坊を抱いた幽々子の第一声。

……………その一言が、周囲を恐ろしいまでに凍て付かせたのは言うまでもない。

どうにか思考が元に戻り、逃げようとした瞬間、氷点下のごとく冷たい目をした衣玖と妖夢に取り押さえられたのも言うまでもない。

「まあ、『冗談はさておき」

「冗談！？ 今までの隠し子とか、パパとか、全部冗談ですか!？」

すっかり騙されていた妖夢が、ポロツと呟いた紫にくっつかかる。

……………てかお前、幽々子の側に何年いるんだよ。子供出来たら分かるだろ。そもそも亡霊は妊娠しないし。

「とりあえず、衣玖もそろそろ離してくれ」

「……………ええ」

しゅるしゅると羽衣が俺の身体から離れていく。

俺と幽々子の間にそういう感情は一切無い。どこまで行っても友人という括りから外れないだろうから。

その辺りはきつと、衣玖も分かってたはず。なんだかんだで夫婦になって数十年経ってるわけだし。

(……………やっぱ、アリスの事かな)

数年前に発覚した「隠し子」疑惑。……………疑惑じゃなかったわけだが。

ちよつと昔に魔界へ行った時、魔界神に一服盛られ（普通の薬は効かない身体のはずだが）、夜這いかけられ、三日三晩搾り取られた。

へろへろになつた俺を待っていたのは、やっぱり欲求不満になって

いた衣玖で……あの時ほど「服上死」という言葉が頭の中にリフレインした事は無かった。

そして数年後、すっかりそんな事も忘れてた頃に……嵐はやって来た。

『ほら、この人がアリスちゃんのお父さんよ？』

『……………パパ？』

突然やって来た、魔界神と人形を抱いた金髪の女の子。

その時、衣玖が側にいた事が運の尽きだった。……………あの時は本当にヤバかった。羽衣でグルグル巻きにされ、博麗神社で査問会まで開かれたし。

そんな査問会の様子が、リアルに「文々。新聞」に「一級フラグ建築士、今度のお相手は魔界神？」という見出しで掲載され、しばらくの間里を歩けなかった（幻想郷縁起に書いていいかと聞かれ、それだけはやめてくれと土下座した事もあった）。

（子供、出来ないからな……………）

俺は妖怪としてはかなり特殊な部類に入る。

そもそも、異なる種の妖怪同士で子供が作れるのかという疑問もあ

った（アリスの時は、アイツが自分で何かしたのかもしれない）。

紫に頼めば境界弄って一発でどうにかなるかもしれないが………やっぱり、そういう事は出来ればしたくない。

そつと衣玖の肩に手を回すと、何も言わずに寄り添ってきた。

「……………いいかしら？」

「どござ」

さつさと本題に入ってくれ。いつたいななんだ？

「あなたの事だから、その子が「成り立て」っていうのは分かっているわね？」

……………まあな。

妖怪が生まれる方法はいくつもあるが、その赤ん坊のように「人間」から「妖怪」になるのは極めて珍しい。

人間から「魔法使い」になる方法はあるが、妖怪になるハッキリとした方法は無い（紫なら何か知ってそうだが、何故かその話に関してはいつも複雑そうな顔をする）。

そしてその赤ん坊は、人間から妖怪になった「成り立て」だ。それ

もかなり特殊な……。

「閻魔様から預かったんだけど、どうもこの子1度死んで、魂が妖怪化する際に乳児化しちゃったみたいなの」

「は？ それどういう事なんだ？」

少し躊躇ったようだが、紫は語り出した。

赤ん坊 人間だった時の名は、織斑千春だったそうだが、弟を庇って死んでしまった事。

何の因果か分からないが、魂の状態から妖怪への転生を果たした事。

そして……何故か赤ん坊の状態からのリスタートになった事。

「どうも今回のケースは初めてみたいで、冥界じゃ大騒ぎらしいわ。妖怪になっちゃったわけなんだし、こっちで面倒見るとって形で落ち着いたんだけど……」

「それと俺たちに何の関係があるんだ？」

「ぶっちゃけると、この子の世話お願い出来ない？」

紫の言葉に、思わず顔を顰める。

いや、確かに子供の世話は手慣れた方だけど、いきなりすぎるだろ。

「あなたぐらいしかお願い出来ないのよ。冥界はあまり生きている妖怪が暮らすのには優しい環境じゃないし」

……………そりゃあ、そうだけど。

かと言って、俺一人の意見では決められない。これでも一応妻帯者だぞ？

そう思い、隣にいる衣玖を見る。

「私は構いませんよ？」

「……………」

……………まあ、仕方ないか。



さて、ここで1度外の世界の事について触れる事にしよう。

織斑千春が死んだ事による、本筋への影響。それは決して小さい物では無かった。

その影響が最も大きく出たのはやはり、彼女の姉……織斑千冬だろう。

普段、弟と妹に姉としての威厳を持って接していたが、彼女が2人に対して抱く愛は本物で、千冬にとって千春と一夏は「守らなければならぬ宝物」であった。

しかし、その片割れは永遠に失われてしまった。

それが千冬にもたらしたショックは甚大で、帰国後の彼女は「世界最強」と呼ばれた頃とはまるで別人のように衰弱し、ついには寝込んでしまったのだ。

そんな彼女を献身的に支えたのが、弟の一夏である。

千春が自分を庇って死んだ事に、千冬と同じ……或いはそれ以上の衝撃を受けた彼は、何も出来なかった弱い自分を恥じ、鍛錬を始めた。

しかし、無茶な鍛錬に乗り出し始めた頃、友人である鳳鈴音と五反田弾から肉体言語を伴った説教を受け、自分なりの強さというものに気づき、未だ立ち直れない千冬を支える事を決意したのである。

一新した一夏の様子に、周囲の人間も安心したが、いくつか失念している事があった。

まず第一に、千冬は弟と妹を大切にしている。周囲にはひた隠しにしているが、立派なブラコン & amp; シスコンである。

第二に、一夏は悪い意味で鈍感だ。特に自分に寄せられる好意というものには一切気づく事なく、自分自身の感情にも極めて鈍い。

……そんな一夏が愛する片割れを失った千冬を献身的に支えた。それがもたらす結果は？

『ほら一夏、お姉ちゃんが着替えさせてやるからな』

『や、やめてくれよ千冬姉！ それくらい1人で出来るって!!』

結果、病的なまでのブラコンと化してしまった。

これまでもそうであったが、2つの対象に注がれていた愛が残った1つに注がれ、それが驚異的なまでのブラコン化を促したのである。

表では以前の「織斑千冬」を装っているが、1度家に戻ると態度は急変。弟に完全依存したダメ姉へと変貌してしまう。

話は変わるが、復帰後の彼女はドイツ軍への義理を果たすため、教官として赴任する事になったのだが……………。

『一夏、お姉ちゃんと海外旅行へ行こう！』

そう言い、無理矢理一夏を大きめのポストンバッグに詰め込み、ドイツへと旅立ったのは後の『織斑千冬伝説』の冒頭で語られる逸話である。

……………なお、一夏はそれなりに整った顔立ちをしている（いわゆるイケメン）ため、ドイツでも彼に近づこうとする女性軍人達を血祭りに上げ、「織斑千冬<sup>ブリュンヒルデ</sup>、未だ顕在」という情報が世を駆け巡った。

最初は一夏も「千冬姉も千春がいなくなって寂しいんだろうな」と微妙にズレた考えをしていたのだが、エスカレートしていく姉の行動に寒気を覚え始め、友人Dに相談し、ようやく姉がどれだけ危険な状態にあるのかを認識した。

このままではマズイ。

この上なくマズイ。

一夏自身、シスコンではあるが、さすがに実の姉とそこまでいたす気は無い。

真剣に考えた一夏は、独り立ちする事を決意。そのため、就職率のいい藍越学園への入学を決めたのだ。

……だが、しかし！

「……………どうして、こうなった」

入試後、1人自宅で頭を抱える一夏。

何故か藍越学園ではなくIS学園の入試会場へ迷い込んでしまい、何故かそこに置かれていた試験用のISを起動させてしまい、何故か事も在るうに試験官を倒してしまったのだ。

当然、女性しか動かせないISを動かせた男性として、一夏は世界中から注目を浴びる結果になってしまい、今のようにマトモに外を出歩けなくなってしまった。

「……………」

ふと、仏壇に置かれた写真が目に入る。

うつすらと微笑みを浮かべた、双子の姉の写真だ。

「……………そうだよな、後悔してたり、くよくよしてちゃダメだよな」

大切なのは、これからどうするか。

この先どうなるか分からないが、それでも自分を信じて進む。  
それが姉の墓前に誓った事だった。

ネタから出た誠：織斑千春 in 幻想郷（後書き）

織斑一夏

千春が死んだ事に自責の念を感じ、「強くなる」事に囚われていたが、鈴と弾に諭される。

その後、弱っていた千冬を献身的に支えるが、それが結果的に彼女の強度のブラコン化を招く事となってしまう。

学校では帰宅部ではなく、剣道部に所属。鍛錬も続けていたため、剣の技量が高い。

重度のブラコンと化した千冬から逃れるため、一刻も早く独り立ちしようと就職率のいい藍越学園への入学を決意。しかし、何の因果かIS学園の入試会場に迷い込み、ISを起動させてしまうという原作通りの展開となってしまう。

風峰千春

人間であった頃の名は「織斑」。

一夏を庇って銃弾に倒れるが、その魂だけが妖怪として転生を果たす。これは閻魔である映姫から見ても珍しいケースらしい。

赤ん坊からのリスタートとなり、幽々子を通じて陸斗へと託される。なお、人間であった頃と妖怪として転生した時間の軸が少し狂っているらしいが………？

織斑千冬

妹・千春を守れなかった事に自責の念を覚え、衰弱。日に日に弱っていく状態だったが、一夏が献身的に支えた事によって立ち直る。

しかし、その代償として一夏に強く依存したブラコンと化してしまう。

表では敢然たる「織斑千冬」として振る舞うが、他人の目の無い自宅などでは一夏に完全に依存した状態と化す。なお、その度合いはエスカレートしており、ネグリジェ姿でベッドに潜り込むわ、風呂場に乱入するわ……etc  
なお、一夏が彼女以外の女性と何かしらの問題を起こしているのを見つけた時、すぐにその場から立ち去ることを推奨する。その場に残るのは自己責任だが、間違いなく血を見る事になるだろうから……。

鳳鈴音

千春の死に強い衝撃を受けた1人。千春にとって親友とも呼べる間柄だった。

一夏を想っているが、彼が未だに千春の死に引きずられている事を知っているため、積極的にアプローチする事が出来ずにいる。

### 【幻想サイド】

風峰陸斗

“空に坐す者”。虚無を司る程度の力を持つ。

幻想郷一の女誑しであり、女性からはこの上なく熱い想いを、男性からは嫉妬混じりの視線を向けられている。

妖怪へと転生した千春を引き取るのだが……？

永江衣玖

“美しき緋の衣”。空気を読む程度の力を持つ。

陸斗の妻であり、半世紀以上連れ添っている。異常なほどモテる夫にやきもきしている。

千春を引き取る事に関しては反対ではないようだが……………。

八雲紫

“神隠しの主犯”。境界を操る程度の力を持つ。

陸斗とは古い付き合いで、一説によると彼が生まれて間もない頃から側にいたらしい。

妖怪へと転生した千春を冥界の閻魔から預かり、陸斗へと託す。

西行寺幽々子

“幽冥楼閣の亡霊少女”。死を操る程度の力を持つ。

元は人間だったが、死して亡霊となった過去を持つ。紫とは生前からの友人だが、彼女には亡霊となってからの記憶しかない。

つかみ所が無く、周囲の者がよく振り回される。大食い。

魂魄妖夢

“半人半霊の庭師”。剣術を操る程度の力を持つ。

代々、幽々子に伝える庭師の者で、祖父から二振りの刀と庭師の任を受け継いだ。

半霊なのに幽霊が怖い。さらに生真面目なため、幽々子によく弄られる。今回の第2次隠し子騒動でも、陸斗が幽々子に手を出したと本気で考えていた。

アリス・マーガトロイド

“七色の魔法使い”。魔法を使う程度の力を持つ。



魔界神の娘で、高いポテンシャルを秘めた人間として生まれ、魔法使いとなった経歴の持ち主。

実は陸斗の娘であり、自分がどの様に生まれたか知っているだけに複雑な感情を抱いているらしいが、それでも父親として陸斗を慕っている。友達が少ない。

神綺

“魔界神”。魔界を創り、魔界に住まう者達を生み出した存在。娘のアリスを溺愛しており、彼女の過剰なまでの愛情に耐えられなくなり、「鬱陶しい」とアリスが魔界を旅立ったのは有名な話である。

なお、アリスだけは唯一、神綺と陸斗の間に生まれたため、正確には魔界人のカテゴリーからは除外される。

四季映姫Ⅱヤマザナドゥ

“楽園の最高裁判官”。白黒付ける程度の能力を持つ。

幻想郷区域の冥界を担当する閻魔であり、真面目で説教臭い。紫が苦手としている人物。陸斗でさえ頭が上がりず、彼女の能力でも彼の女性問題には白黒付けることは不可能だと言われている。

何故、幻想郷の外で死んだ千春が彼女の元へと送られ、さらに魂だけの状態から妖怪化し、その上赤ん坊になってしまったのか。部下のサボタージュと併せ、彼女の悩みの種となっている。

**B A D E N D**から始まるストーリー【縁切りルート】（前書き）

タイトルの通りです。

前提条件がちょっと異なった事で、こうなっていました。

## BAD ENDから始まるストーリー【縁切りルート】

織斑千春は幼い頃から愛を求めていた。

愛したい。愛されたい。

ただひたすらに、愛を求めていた。

しかし、彼女にとって不幸だったのは、彼女が生まれた先が愛とは縁遠い場所だった事だろう。

まず織斑家には父と母と呼ばれる存在は無く、千春が物心ついた頃にはそんな存在は居なかった。

親代わりとも言えるのは年の離れた姉であり、彼女は両親に関しては何も語らない。ただ「お前達の家族は私だけだ」と。

それならば、千冬の愛情が彼女に注がれたかと言つと、そうでもない。

千春には双子の弟がいた。名前は一夏。

何でもそつなくこなす優等生タイプの千春とは違い、一夏はやんちゃで何かと手のかかる少年。

自然と千冬の注意や関心は一夏の方へと向けられ、言い方は悪いが、千春に対する対応がおざなりなものになっていた。

愛されたい。けれど、愛されない。

彼女は家族からの愛を求めた。そのためにより一層の努力を重ねた。だが、彼女のその思いとは裏腹に、千冬の愛は一夏に、一夏の愛は千冬にだけ注がれていた。

中国人の親友は、何度か諦めさせようとも考えた。しかし、

『それでも、好きだから』

そんな千春の言葉に、何も言えずに終わっていた。

だが、彼女ももしかしたら………心のどこかで理解してしまっていたのかもしれない。

どこまで行こうと、何をしようと、自分は愛されないのではないかと。

織斑家において、自分は異分子なのではないかと。

そんな彼女の一途な思いが砕かれる日が訪れてしまう。

第2回モンド・グロツソ。

インフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器の世界大会。かつて千冬はその第1回大会でブレード1本を携えて頂点に立った。

千春も一夏も、そんな彼女を誇りに思っていた。

第2回大会も順当に千冬は勝ち進んでいき、ついに決勝へと駒を進めた。

しかし、決勝が行われるその日、千春と一夏は何者かによって誘拐されてしまう。

当然、決勝戦を放棄して、千冬は2人の救出へと向かう。

そしてその日、織斑千春は“壊れた”。

診察室の中、彼女達が向かい合っている。

……片方は明確な怒りをその表情に宿して。

「どつして、斬ったの？」

そう質問しても、千冬は答えない。  
それが千春の苛立ちをさらに加速させる事になる。

「あの人は私を助けてくれたんだよ？　なのに、どうして斬ったの」

「……………あの男が、お前を誘拐したと思ったからだ」

「……………そう」

意外にも、千春から返ってきたのはそんな小さな反応だった。  
ふと、視線を上げた千冬の目と千春の目が合い、息を呑んだ。  
千春が目に住していたのは、失望という名の感情だった。

「いつもそう。お姉ちゃんは私の事なんて見てない。私の言葉なんて聞いていない」

いつも、一夏の事ばかり優先してる。

「違う！　私は」

「ならどつして、やめてって言ったのに聞いてくれなかったのッ！  
！」

反論、出来ない。

黙り込む千冬を目の当たりにして、千春の怒りは既に針を振り切っている。

明確なる失望。振り切った怒り。もう、姉妹としての仲は破綻してしまっている。

「……………出てって」

「ち、ちは」

「出てって！ もう私の前に現れないで！！ 出てってよ！！」

……………あれから3年。

わたしが『織斑』の名前を捨てて、3年が経った。

「初めまして皆さん。風峰千春と言います」

クラス全体を見渡しつつ、にっこり微笑んでそう言葉を紡ぐ。  
何事もまず、第一印象が大切。……………それを考えすぎて、隣のバカは失敗したわけだけでも。

「単刀直入に言わせてもらおうと、私は最強になるためにここへ来ました」

ざわ、と戸惑いが広がる。

これまで頭を抱えていた一夏も、私を信じられない目で見ている。ゆっくりと、視線を教壇に立つ織斑先生へと向ける。彼女はただ真っ直ぐに、私を見据えている（隣の山田先生は目茶苦茶動揺してるけど）。

……………いい度胸してる。自分の罪からもう逃げない、とでも言いたいの？ ま、どうでもいいんだけど。

「だから皆さん、せいぜい私の踏み台になってくださいね？」

織斑千冬を見据えて、そう言い放った。

これは宣戦布告。私は私のためだけに、最強を目指す。

「……………風峰、1つ質問させてもらおう」



「はい？」

厳しい顔のまま、私に向かって問いかける織斑先生。  
うーん、どうやら本当に私と向き合うつつもりみたい。……今更だ  
けど。

「お前は何故、最強を目指す」

ああ、そっち系の質問か。

私の言葉を、もしかして「復讐」とかそーゆー意味で受け取ってた  
り？ それだったらかなりウケる、どこまで自意識過剰なんだと。

「まあ、ぶつちやけるとですけど、私あんまり過去に拘らないタイ  
プなんです。多分」

その言葉に過剰に反応したのは一夏だった。

ま、3年前に喧嘩別れしてたわけだし、その事も含めて「どうでも  
いい」とでも聞こえたんでしょ。

目の前の織斑先生も今の言葉は見過ごせないのか、より厳しい目で  
私を見ている。

「色々あって何がしたいのかわらなくて考えていて、紆余曲折の末に  
それに思い至ったって事ですな」

ほら、志々雄真実だって言ってるでしょ。この世に生まれたからには、天下の1つでも狙って〜って。

私は女だけど、頂点目指して突っ走るのも悪くないかなって思ったわけだね、これが。

「そう言うわけだから、織斑先生も世界の頂点を目指すカワイイ教え子のため、せいぜい踏み台になってやってください」

私の発言に、クラス全体が凍り付いた。

そう言われた当人の隣に立つ山田先生なんて、もう血の気が引いて青白い顔になってる。

だってこれ、織斑千冬に対して喧嘩売ってるような台詞だし。

「……………いい度胸だな」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

今更向き合おうなんて、本当にいい度胸してますね？  
言葉にせずとも、それは伝わっている。

しばらくの間、そんな一触即発の空気が流れた。それに当てられたクラスメイトは気の毒としか言い様がない。

「……………覚悟しておけ。ここはそんなに甘くないぞ」

「織斑先生、風峰さんと知り合いなんですか？」

放課後、誰もいない教室で山田君がそう尋ねてきた。誰かがいる場所では話せない内容なのだと、こういった場所で尋ねてきてくれたのだろう。

「何故、そう思う？」

「だってさっきの織斑先生、明らかにおかしかったですし、それに風峰さんも何て言うか……織斑先生個人の事を分かった上で発言してるようでしたから」

……やはり、分かる者には分かるか。

「……あれの昔の名は『織斑千春』という」

「へへ、織斑先生と同じ名字ですね……え？」

ぎぎぎ、と錆び付いたように首をこちらへと向ける。

ああ、恐らく考えている通りの事だ。

「織斑の双子の姉。……私とも姉妹という間柄に当たる」

「え、ええっ！？ でも、どうしてそんな……それに、名字だつて違いますよね!？」

「3年前に他の家に養子に行った。縁も切られているし、戸籍上では赤の他人だ」

あの日、完膚無きまでに千春から拒絶された私は、ただひたすら恐れれた。

千春と向き合う度に、自分の罪を突きつけられるのではないかと恐れ、ドイツ軍から教官として就任要請が来た時、幸いとばかりにドイツへと旅立った。

……だが、それは所詮「逃げ」でしか無かった。

1年後、帰国した私を待っていたのは、千春が他の家に養子として入り、織斑の家から出て行ったという現実だった。

「すれ違って、あれから向き合う事を恐れて逃げた」

何度か連絡してみようかと思ったが……何を言われるのか怖くて、それすらも出来なかった。

千春がIS学園に入学すると聞いて、最後のチャンスだと思った。ずっと逃げ続けて来た私が、千春と向き合う事の出来る最後のチャンス。

「……でも、織斑先生。さっきの……」

「ああ。みつともなく縋り付こうとして、その結果があんなザマだ」

視線を落とす山田君に、自嘲めいた笑みを浮かべる。

『その言葉、そっくりそのままお返しします《今更向き合おうなんて、本当にいい度胸してますね？》』

あの言葉を聞いても分かる。

私はもう、姉として向き合う事は出来ない。

だからせめて、教師として千春と向き合って行きたい。

……それが今の私に出来る、罪との付き合い方だ。

「織斑千冬がうざったくて仕方ないんですけど」

「……………どんな風に？」

整備室にて、カチャカチャやってる親友の隣でそう愚痴る。  
青い髪にどことなく小動物系な雰囲気なラブリーな我が親友。その  
名は更識簪。私が認める数少ない相手でもある。

「分かりやすく例えると、やたらめったら妹分を補給しようとスキ  
ンシップを試みる楯無さんくらい」

「それは……………ウザい」

あれを思い出したのか、渋い顔になる簪ちゃん。  
半年ほど前の「お姉ちゃんなんて大嫌い！」発言以来、なんていう

か微妙だった姉妹仲が113度ほど方向転換して、かなりおかしい方向へと向かっている気がする。

ぶっちゃけると、楯無さんが暴走してる。それはもう、シスコンを公言するほどに（入学式の会長挨拶で、締めくくりに簪ちゃん個人への愛を語った際、簪ちゃんの華麗なドロップキックが炸裂し、虚さんによって引つ張っていかれた）。

……まあ、あっちの方が数段マシなのかもしれないけども。

「でも嫌いじゃないんですよ？ あの人の事」

「……まあ、それでも……お姉ちゃんだし」

誤解のないように言うておくけど、この2人の姉妹仲は悪いわけじゃない。

これまでは、簪から楯無さんに対する劣等感、楯無さんから簪に対する遠慮などで、2人ともどことなくこちない状態にあった。

……それがあの発言で元から拗れた状態が、さらに拗れに拗れて、結果オーライな事になったので、まあいい事にしておこう。

「私みたいに完全破綻しなくて良かったじゃん」

その言葉にハツとなって私を見る簪ちゃん。

私はさー、もう元に戻らない………ていうか、元に戻る必要が無いって分かっている。私は元々、織斑家にとって異分子だったんだって。3年前のあれこれはきっかけに過ぎなくて、織斑家を出て、やっと収まるべき鞘が収まったんじゃないかな。

「……………千春は」

「うん？」

「織斑先生を、許したの……………？」

……………ぶっちゃけるとだけど、まだ怒りやら憎しみやら、そーゆー負の感情って奴はまだ残ってる。

でも、許したか許してないかで言えば、許してる。

シャーリーだって言ってたじゃん。「許せない事なんて無い。それは許さないだけ」って。

「とつくに許してるよ、あんなバカ。てゆーか……………」

あれに、許さないだけの価値なんて無いでしょ？

「……………そう」

「失望した？ 友達がそんな最低な人間だって知って」

自分が壊れてしまってるって事は自覚してる。

最初は、織斑千冬も、一夏も、全部壊してやるうって思ってた。

でも……………いつからだったけ。なんかどーでも良くなって、風峰家に



引き取られてから、価値観がどんどん方向転換して、それでどうせなら最強目指してみようかなって。  
ま、それもある意味、復讐なのかもしれないけど。

「今更。それも込みで、千春の事好きだから」

……ん、ありがとう。

**BAD ENDから始まるストーリー【縁切りルート】（後書き）**

と言うわけで、3つめのルート「縁切りルート」のダイジエスト版をお送りしました。

・千春と千冬・一夏との間ですれ違いが生じていた。  
・3年前の誘拐事件がきっかけで、家族仲が完全に破綻。千春も“壊れた”。

主な違いはこの辺りですかね。  
愛するが故に壊れてしまった。……………だからこそ、この物語へと繋がってしまったわけなんです。

風峰千春

本作の主人公。15歳。

昔の名前は「織斑千春」。織斑千冬の妹で、一夏の双子の姉。かつては心優しく、「愛する」事と「愛される」事に至上の喜びを感じていたが、現在の彼女は極めてシニカルで現実主義者。相手を完膚無きまでに叩きのめす事が好きだと公言するほどDS。  
3年前の誘拐事件がきっかけで千冬との姉妹仲が破綻。千冬がドイツへと向かって間もなく、織斑家と縁を切り、風峰家の養子となる。実力は未知数だが、IS学園には最強になるために来たと公言するだけあり、高いものと思われる。

イメージC・V 田中理恵さん

「ローゼンメイデン」シリーズの水銀燈

「機動戦士ガンダムSEED」のラクス・クラインなど

転生兄妹 in ハルケギニア（前書き）

新ネタシリーズ『連続転生物語』です。

転生の順番はリリカルなのは ゼロの使い魔で、前の世界でも色々ありました。

まあ、その辺りはまた今度投稿しますので。

## 転生兄妹 in ハルケギニア

妹・玲夜……ハルケギニアにおいては、レイヤ・ド・トリステインが前世云々の記憶を取り戻したのは、3歳を迎えて間もない頃だった。

自分の名前、周囲の状況、それら全てを統括した上で出した結論に、思わず頭が痛くなった。

「ハルケギニアって……『ゼロの使い魔』じゃないですか!！」

死亡率の高さは、前回の『リリカルなのは』とは桁が違う。

向こうはまだ非殺傷とかがあったので、まだ死亡率はそこまで高くは無かったけど、こっちはガチでヤバイ。

まず、将来的に聖戦やらが発動されて、物凄い死者が出る。

「……………問題は、姉ですか」

ここにはいない双子の姉の事を考える。

既に分かっているかもしれないが、彼女の双子の姉の名はアンリエッタ・ド・トリステイン。原作だと将来、トリステインの女王となる少女だ。

アンリエッタの将来の行動。中盤以降はともかく、序盤はハッキリ言ってマズイ。

親友を戦地に送り込んだり（下手したら国が割れてた）、国よりも男を選んだり、挙げ句の果てには復讐で戦争ふっかけたり。

自分という異分子を孕んだ世界において、それが実際に行われたらどうなるか分からない。

「とりあえず、あの人にはそれとなく気をかけて、王族の務めという奴を教え込む事にしましょう」

それでしっかり女王やってくれば文句は無いのだから。

だが、レイヤにとってそれ以上に気にかかる事があるのが事実だった。

恐らく自分と同じようにこの世界に生まれ変わっているであろう兄・陸斗の存在。

元の世界の名前のままでは無いかもしれないが、それでも同じようにイレギュラーがいるならば気づく。

兄と再会できる日まで頑張ろう。

（あなたが王族だろうが貴族だろうが平民だろうが、絶対探し出し

ますから！！)

が、陸斗の転生先について、想像の遙か右斜め上を行っていた事は誰も知らない。

レイヤの覚醒から13年が経過し、ついにレイヤ達も16歳を迎えていた。

これまでの事を掻い摘んで説明するのだが……………レイヤが恐ろしく苦労しているとだけ言っておこう。

当初はアンリエッタをそれとなく説得して、王族らしくさせようとしたのだが……………無駄な試みだった。

凄まじくお転婆な彼女は、対抗意識なのかレイヤの言葉を全く聴かず、さらに母親であるマリアンヌも「子供が難しい話をするものじゃないありません」と聴く耳を持たない。

数年は根気よく説得していたのだが、ついに父親……国王が逝去し、マリアンヌが喪に服したままの状態を見て、ついに自分が何とかしないとダメだと判断した。

『ダメだ、この王家。早く何とかしないと……』

そんなレイヤがまず味方に付けたのは、国の中枢を担うマザリーニ枢機卿だ。

原作において、国王が逝去してから喪に服したままのマリアンヌ后妃に代わり、トリステインを支え続けた手腕は本物であり、野心を持たずにただ国のため尽くした忠臣でもある。

が、やはり周囲の貴族達からすれば、ロマリアの次期教皇と目されていた男が、突如トリステインへ鞍替えしたのだから、王位篡奪を目論む「鳥の骨」という認識でしか無く、信頼など、一部の者達を除いて雀の涙ほど無かったのだが。

『マザリーニ卿。この国を守るため、私に力を貸してくれませんか？』

そう話を持ちかけ、信頼を勝ち得たので、そこまで難しくなかった。

そこからは財政の立て直し、インフラの整備、汚職官僚の肅正……  
…とにかく、力を入れた。

汚職官僚の中には有能な人材もいたため、彼らに関しては『（要約）  
これまで甘い汁吸ってきたんだから、その分王家に貢献してもらおうか』という『ファイアー・ボールから始まり、ライトニング・クラウドで繋ぎ、カッター・トルネードで締める交渉術』で領かせた。

現在、馬車馬のごとく働かせているので、せめて老後くらいは平穩に暮らさせてやるうかとレイヤも考えている。

「……………やっぱり、この話を受けるのが1番だと思うんですけどね」  
長引いている会議の議題は、ゲルマニアから持ちかけられたある話について。

ぶっちゃけると、『アンリエッタ王女と皇帝アルブレヒトとの婚姻』だ。

トリステインやアルビオンなどと比べ、歴史の浅いゲルマニア皇家に  
とって、始祖ブリミルの血が欲しいのだろう。

現時点において、大分立て直されたとはいえ、ゲルマニアから見ればトリステインは弱小国家。同盟を結ぶ代わりに王女を差し出せ、  
そう言っているのだ。



「しかし殿下！ ゲルマニアなどの成り上がり風情に！」

「お黙りなさい。……………ヴァリエール公爵、あなたの意見を聞かせてもらえませんか？」

レイヤの言葉に、これまで沈黙を保っていた男性……………現ヴァリエール公爵が口を開く。

貴族達の中では中心人物であり、トリステインにおいても有数の大貴族。それがヴァリエール家であった。

「確かに殿下の仰る通り、我が国とゲルマニアの国力は比べ物になりません。今回の話は破格のものと言えるでしょう」

「でしょうね。もし向こうが私を指名していたら、私が向こうへ行っていたんですが」

その言葉に、貴族達が渋い顔になる。

ゲルマニアがレイヤを指名しなかった理由は唯1つ。乗っ取られるからだ。

沈没寸前だったトリステインを立て直し、圧倒的なカリスマで貴族達を統率し、高い政務能力を発揮するレイヤを取り込んだ場合、トリステインを乗っ取るどころか逆に乗っ取られる危険が高い。

そもそも、トリステインを支えているレイヤが国から出て行く事だ

けは、マザリーニやヴァリエール公爵が何としてでも防がなければならぬ事であったが。

だからこそ、政務に携わる事も少ないアンリエッタ王女に狙いを定めたのだらう。

「ですが、その……問題は」

話を引き継いだマザリーニが、言葉を濁す。

彼の言いたい事は分かる。周囲の者達も気の毒そうな顔をしていた。レイヤもとつても困った表情を浮かべて、ため息を吐いた。

「……………あのバカ王女。トリステインの花とか言われてるけど、実際は頭の中がお花畑じゃないんですか？」

王女としての言葉遣いでは無いが、全員彼女と同じ考えだったので言葉遣いを咎める者はいなかった。

アンリエッタ王女がトリステインのウエールズ皇太子にお熱なのは、トリステインの高位貴族達の間では有名な話である。

何でも『ラグドリアン湖の園遊会』で水浴びをしているところに遭遇し、それ以来互いに好き合っているとかいけないか。

「いつそのこと、もう何年も喪に服したままのバカ母でも差し出しますか。年齢的にも釣り合いが取れるでしょうし」

「で、殿下……さすがにそれは」

いきなりぶつちやけ始めたレイヤに、マザリーニを始め、貴族達が冷や汗をかき始める。

最悪の場合、強制的に魔法をかけて嫁がせるというのも有りだ。これは実際に昔、政略結婚などでも使われていた方法であり、現在こそ禁術に指定されているが、最悪使う事も辞さないだろう。

とにかく、今のアンリエッタとマリアンヌの立ち位置というのが、単なるタダ飯喰らいというのは変えようのない事実だ。

嫁ぐなり、政務に携わるなり、仕事の1つでもして欲しい。それがレイヤを始めとする数多くの貴族達の意見だった。

と、そんな時だった。

「会議中申し訳ありませんが、緊急時につき失礼いたしますー！」

慌てた様子で、1人の侍女が会議室へと飛び込んで来た。

彼女はレイヤが内密に雇い入れた密偵の1人だ。主に情報のやり取りを担当している人間のはずだが……。

「何事ですか」

「は、はい。たった今、オールド・オスマン殿より殿下とヴァリエール公爵殿に緊急の連絡が！」

名指しされた両名が思わず顔を見合わせる。

オールド・オスマンはトリステイン魔法学院の長を務める老人で、普段は好々爺のエロジジイだが、熟練したメイジでもある。そんな彼から緊急の連絡……嫌な予感しかしない。

侍女が差し出した書簡を、まずはレイヤが手に取り、開く。

……数秒後、レイヤの顔が引き攣るのを見て、周囲の者達の嫌な予感が倍増した。

「あ、あの……殿下？」

「……………どござ」

レイヤが顔を引き攣らせたまま差し出した書簡を取り、ヴァリエール公爵も読み進める。

それに書かれていた内容を理解した瞬間、彼の表情が凍り付いた。



れた。

「おい、ゼロのルイズ！ まだ成功しないのか？」

「諦めた方がいいんじゃないの？ なんてっ たってゼロなんだもの」

嘲笑の声が聞こえる度に、男性が彼らに厳しい視線を投げかける。

が、当の声を向けられる少女は気に留めた様子も見せず、再び杖を挙げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、“使い魔”を召還せよ」

その瞬間、再び爆発した。

爆発。それが「ゼロ」の二つ名の由来だった。

幼少期より彼女の使う魔法は全て爆発してしまい、決して成功しない。

魔法の成功率がゼロ。故にゼロのルイズ。

(……………また、失敗か)

このままだと進級できず、実家に帰るしかない。

父親や下の姉はともかく、母や上の姉とは壊滅的に仲が悪い（実際は彼女達も愛情を伝えようとしているのだが、幼少期のあれこれですれ違いが続いてしまっている）。そのため、実家に帰っても特にやる事などないのだが。

と、そんな時だった。爆煙の中に影らしきものが見えたのは。

「成功した!？」

「まさか、ゼロのルイズが？」

周囲がざわつく中、一番驚いていたのは当のルイズ本人だった。

今まで1度も成功した事の無かった魔法が成功した………？

否、成功か失敗かはどんな使い魔を喚び出したかにもよる。わき起こる衝動を抑えつつ、煙が晴れるのを待つ。

煙が晴れたその時、周囲の空気が完全に凍り付いた。

「……………いきなり景色が変わったかと思ったが、ここはどこだ？」

短く切り揃えられた金色の髪。

澄んだ碧い瞳。

顔立ちも十分に美形と呼ばれる部類に入るだろう。

しかし、ただ1点の特徴がこの場を凍て付かせる要因となっていた。

それは普通の人間とは違いすぎる、尖った長い耳。それが意味しているのはただ1つ。

「え、エルフ……………!!」

東方の砂漠に住まう異種族の名を、誰かが恐れの声で口にする。

強大な魔法力を持ち、聖地を支配している恐るべき種族。人間にとつては畏怖の対象だ。

現れたエルフに対し、禿頭の男性……………コルベールが杖を構える。

使い魔召喚の儀式では、召喚したメイジでは御しきれない魔獣が稀に召喚される事もある。そのような非常時に備え、実力のあるメイジが控えている。

『炎蛇』の2つ名を持つトライアングルメイジ、ジャン・コルベールも魔法学院においてはそんな腕利きの1人だった。



「……………」

ただ1人、ルイズは召喚して少しの間、呆然としていたが……………。  
すぐにいつもの様子に戻り、そのエルフの方へと歩いて行く。

「ルイズ、よしなさい！」

「ミス・ヴァリエール、殺されるぞ!？」

周囲のそんな声を気に留める事もせず、ルイズはエルフへと歩み寄る。

小柄なルイズが彼を見上げる形で正面から向かい合う。最初に口を開いたのはエルフの方だった。

「なあ、ここはどこだ？」

「トリスティン。あんた達が言う蛮人の国よ」

「……………なるほど。通りで変な奴が多いと思った」

今ここで1番変なのはアンタよ。

そう言ってみようかと思ったけど、それを言ったら卒倒する生徒も

いるんじゃないかと思い、敢えてルイズは口にしなかった。

「で、アンタは私に召喚されたってわけ。どうする？」

「どうするって、どうすりゃいいんだ？」

「私と使い魔の契約を交わせば私の使い魔なんだし、最低限の面倒くらい見てあげられるけど？」

そう言われ、エルフの男は顎に手を当てて考え始めた。

ルイズ以外の者達にしてみれば、それが永遠に近い時間にも感じられた。

そして少しして、短く「うん」と答える。

「ま、行く当ても無いし、どうせ向こうにいたってつまないし、しばらくこっちにいるとするか」

「……………そう」

彼が了承したのを確認すると、ルイズはちょいちょいと手で膝を突くように指示する。

何かと思いつつも、彼はその場に膝を突く。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そう言い、自分の唇で彼の唇に触れる。

コントラクト・サーヴァント。使い魔契約を施すための呪文だ。

大抵は人間以外の生物が召喚されるため、キスをする事に抵抗はほとんどない。

だが、相手はエルフとは言え、姿形は人間と変わらない。しかも男だ。ルイズも一応一般的に年頃の少女なので、抵抗が皆無だったわけではない。

触れ合う時間はほんの少し。……………が、

「んっ!?!」

ルイズが突如、変な声を上げた。

エルフとコントラクト・サーヴァントなんてして、何かあったんじゃないか。……………が、それは違った。

ディープキス。フレンチキスとも言われるそれは、ルイズの口内を彼の舌が蹂躪していた。



顔を見合わせ、また笑う。

周囲はそれに呆気にとられ、エルフ相手に対等に話すルイズに、どこか畏怖のような感情を覚えていた。

「私はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ご主人様でもルイズでも好きなように呼びなさい」

「じゃあルイズ。これからヨロシク頼む。……………そうそう、俺はリクト」

『ネフテス』のリクトだ。

## 転生兄妹 in ハルケギニア（後書き）

第2王女（転生者）。スレたルイズ。エルフの使い魔（転生者・ガンダールウ）。

とりあえず、他では滅多に見ない取り合わせでお送りしました。

貴族に転生っていうのはよく見るんですが、エルフに転生するといふのはあまり見ないので。

それに、家庭環境からすつかりスレてしまったルイズというのも珍しく無いでしょうか？ カリーヌやエレオノールから散々詰らされていたら、普通スレてしまうのではないかと思うのですが。

そんなこんなでそんな要素を詰め込んでみたら、こんな風なお話に仕上がってしまいました。

では、主要人物の紹介です。

リクト

ルイズに召喚されたエルフの少年。

転生者の兄の方で、ネフテスにエルフとして生まれてからは退屈な日々を送っていた。どこか諦観したルイズには親近感を覚えており、彼女の使い魔として過ごす事を決意する。

戦士タイプでは無く、メイジタイプのエルフ。中でも『反射』と『電撃』を得意としている。

対外的に姓が必要な時は『リクト・カザミネ』を名乗る。

レイヤ・ド・トリステイン

トリステイン王国第2王女。アンリエッタの妹姫。

転生者の妹の方で、生き残るべく破滅フラグの立っているトリステインを必死に立て直そうと奔走している。当初はアンリエッタに頑張ってもらおうと思っていたが、あまりにもダメなので見限り、自分で何とかしないとダメだと悟り、自ら変革に乗り出す。

火と風のトライアングルメイジで、体力が無いので長時間戦闘は出来ないが、精神力の使い方が上手らしい。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

本作のヒロインの1人。

幼少期から一切魔法を使う事が出来ず、それを家族（特に母親や上の姉）に詰られて育ったため、どこか諦観した雰囲気纏っており、キュルケの挑発にも「ツエルプストー？ 何それ美味しいの？」と何処吹く風の反応を返している。家族との仲も壊滅的（父と下の姉とは普通に接する）であり、入学してからは滅多にやり取りをしていない。通称「スレルイズ」。

二つ名は原作通り「ゼロ」だが、当人は今更だと思っているため、クラスメイトから貶されても過剰に反応したりしない。

リクトを召喚した事で、彼女の物語がようやく始まる事になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6392v/>

---

ウィーゼルのネタ倉庫

2011年10月28日02時11分発行